

精神保健福祉士の学習行動に関する文献研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学人間科学研究所 公開日: 2023-04-06 キーワード: 作成者: 坂入, 竜治 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2077

精神保健福祉士の学習行動に関する文献研究

Literature Review on Learning Behaviors of Mental Health Social Workers

坂 入 竜 治*
SAKAIRI, Ryuji

I. はじめに

精神保健福祉士には、精神保健福祉士法第41条の2において「資質向上の責務」が規定され、精神保健福祉士の倫理綱領においても専門職としての責務として、精神保健福祉士は専門職としての価値に基づき、理論と実践の向上に努めなければならないとされている(公益社団法人日本精神保健福祉士協会 2018)。

福祉系大学においては、2021年4月入学者から新カリキュラムによる精神保健福祉士の養成が始まっている。新カリキュラムへの見直しは、2018年12月からの「精神保健福祉士の養成の在り方等に関する検討会」にて議論が開始され、2019年6月の「精神保健福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」(厚生労働省 2019)、2020年3月の「精神保健福祉士資格取得後の継続教育や人材育成の在り方について」(厚生労働省 2020)の公表へと続いた。こうした一連の動向で特筆すべきは、カリキュラムの見直しと共に、精神保健福祉士を取り巻く環境に的確に対応できる人材育成は、養成課程のみで完結するものではなく、資格取得後の継続教育や人材育成の在り方も重要であると強調されたことである。

また、上記の動向と関連して、厚生労働省の総合福祉事業である「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築及び地域共生社会の実現に向けた精神保健福祉士の資質向上の在り方等に関する調査」を受託した公益社団法人日本精神保健福祉士協会による卒後教育と現任教育の課題に関する調査においても、卒後教育・現任教育の学びの場や機会は多様であり、地域によって多様な形態があることが明らかになっている。そのため、卒後教育の方策をパターン化して示すことは困難であることから、「精神保健福祉士初任者である私の学習プラン」の作成と支援について提言している。養成校卒業時に、卒業生がこれから精神保健福祉士として働く職場や地域の実態に応じた新人期の成長・学習プランを教員とともに作成し、必要な支援(学び、相談、スーパービジョン、ネットワークの基礎など)

* 人間科学科 非常勤講師、昭和女子大学 専任講師

をどこでどのように受けることができるかをイメージできるようにしておくことが望ましいとされている（公益社団法人日本精神保健福祉士協会 2020a）。

では、養成校卒業後の学びのリソースにはどのようなものがあるだろうか。坂入（2018）は、学びの提供主体を①職場内教育、②養成校・自主勉強会等による研修、③職能団体・行政等による研修、の3つに整理し、これらの体制の相補的關係性を示しながら、学びの主体である精神保健福祉士の側に立った学びの方法やプロセスの提示、「学習」の視点に立脚した議論の必要性を提起している。つまり、学びの提供主体や機会は様々あり、それらのリソースを精神保健福祉士が自ら活用して主体的に学び続けることが肝要と言えよう。

今後は上記の背景を踏まえ、養成教育卒業後の現任者の学びについて具体的な方略を示していく必要があると考える。

Ⅱ. 本稿の目的

そこで本稿では、養成教育卒業後の現任者の学びについて、具体的な方略を模索していくにあたり、「学習」の視点に立った研究を進めていくことにする。大辞林第三版によれば、「学習」とは、

- ① まなびおさめること。勉強すること。
- ② 『生』生後の反復した経験によって、個々の個体の行動に環境に対して適応した変化が現れる過程。ヒトでは社会的生活に関与するほとんどすべての行動がこれによって習得される。
- ③ 『心』過去の経験によって行動の仕方がある程度永続的に変容すること。新しい習慣が形成されること。
- ④ 『教』新しい知識の獲得、感情の深化、よき習慣の形成などの目標に向かって努力を伴って展開される意識的行動

とある。つまり学習とは、経験に基づいて行動を変容したり、意識的に行動することであり、現任者である精神保健福祉士を「学習者」と捉えることで、どのように自ら学習していくのか、その具体的な行動のレパートリーに焦点を当てることにより、学習行動を指標化することにつながると考える。

そのために本稿では、学習行動の指標化の基礎資料となる具体的な行動を明らかにするために、文献研究の方法を用いて、国内で既に開発されている指標・尺度の構成概念をレビューしていく。レビューにおいては、指標・尺度の項目のうち、学習行動に関する内容の項目を抽出し、同じ意味内容ごとにカテゴリー化していく。

なお、本稿では2段階の文献研究を行っており、第1段階ではソーシャルワーク分野を対象としたレビューを実施し、第2段階では看護分野を対象としたレビューを実施した。以下、段階ごとに論じていく。

Ⅲ. 文献研究（第1段階）の方法と結果

1. 文献抽出と選定について

CiNii(国立情報学研究所 論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/>)を用いて検索式を「(能力 OR 資質 OR 研鑽 OR 専門職 OR 専門性) & (福祉 OR ソーシャルワーク OR ソーシャルワーカー) & (尺度 OR 指標)」として検索した結果、1,040件が該当した(2021年7月12日アクセス)。これらについて、①ソーシャルワーカーを対象とし(学生含む)、②実践能力などの総体を測定するもの(特定のスキルを対象にしたものは除外)を基準として絞り込みをした結果、5件が残った。さらに、南・武田(2005)の論文に記述されている南・武田(2004)が開発した「ソーシャルワーク専門職性自己評価(Social Work Proficiency Inventory)」に関する図書を追加し、論文5本、図書1冊を研究対象とした(表1参照)。

表1 文献研究（第1段階）の対象となる論文・図書

論文名	年	研究の目的	測定する概念
山下匡将・伊藤優子・杉山克己・他(2015)「特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性-ソーシャルワーク専門職性自己評価尺度(SWPI)を用いた検討-」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』51(4), 201-214.	2015	特別養護老人ホームにおいてレジデンシャル・ソーシャルワークを担う生活相談員が有する専門職性の特徴を概観する。	専門職性
一瀬貴子(2013)「高齢者虐待対応専門職としての社会福祉士の『専門職性自己評価』に対するアイデアルイメージと実践的意識との比較」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』16(2), 19-28.	2013	本稿における第一の目的は、地域包括支援センターに配置された社会福祉士の「高齢者虐待対応専門職としての専門職性自己評価」指標の構成要素を検討すること、第二の目的は、その専門職性がどの程度社会福祉士の職務の特徴を表しているか(アイデアルイメージ)と、それらを実際に虐待発生事例の支援過程でどの程度意識して仕事にあたっているか(実践的意識)の差異を明らかにすることである。	専門職性
西川ハンナ(2009)「ソーシャルワーク専門職の価値志向性測定試案」『共栄学園短期大学研究紀要』(25), 67-78.	2009	ソーシャルワークの価値を、ソーシャルワーカーの専門職志向から測る「ソーシャルワーク専門職の価値志向性尺度」の開発を目的とする。	価値志向性
南彩子・武田加代子(2005)「学生のソーシャルワーク専門職性到達度とその関連要因の分析」『天理大学学報』57(1), 17-29.	2005	専門職性の高いソーシャルワーカーを養成するためには、養成教育の段階からソーシャルワーク専門職性を意識した教育を行なっていることが前提であるとの認識から、教育の場で用いることのできる「ソーシャルワーク専門職性到達度自己評価尺度:学生版(SocialWorkProficiencyInventoryforStudents)」を作成し、構成概念妥当性の検証とソーシャルワーク専門職性に影響を及ぼすと考えられる要因を明らかにし、学年差の見られた使命感項目について考察する。	専門職性
武田加代子・南彩子(2002)「ソーシャルワークの専門職性評価指標作成の試み」『社会福祉学』42(2), 32-42.	2002	本研究の目的はソーシャルワークの専門職性に関する先行研究をふまえたうえで、実際に使用することのできる専門職性判定のための評価指標の作成を試みることである。専門職性を構成する7つのカテゴリとそれに対する67の下位項目を設定しそれらの妥当性を調査によって検証する。	専門職性
図書名	年	研究の目的	測定する概念
南彩子・武田加代子(2004)『ソーシャルワーク専門職性自己評価』相川書房.	2004	ソーシャルワーカーが専門職性を高めるために、自己評価し、次の適切な行動へと結びつけるため。	専門職性

2. 文献研究（第1段階）の結果①

表1にある研究対象6本で紹介された指標・尺度を概観すると、ソーシャルワーカー個人がとる学習行動については「専門職性」の要件の1つとして位置づけられてきたことが分かった。当初は、武田・南（2002）や南・武田（2004）、南・武田（2005）、西川（2009）のようにソーシャルワーカー全般を射程にした指標・尺度開発が進められ、その後、一瀬（2013）や山下・伊藤・杉山・他（2015）により特定の領域（主に高齢者福祉）における専門職性へと研究が進んでいる。

3. 文献研究（第1段階）の結果②

次に、研究対象6本で紹介されている指標・尺度項目のうち、ソーシャルワーカーの学習行動に関する内容の項目を抜き出し、同じ意味内容ごとにカテゴリー化し整理した（表2参照）。

表2 尺度項目のカテゴリー化

カテゴリー名	学習行動にかかわる尺度項目
学会・研修等への参加	虐待に関する学会・研究会・研修への参加（一瀬2013） 自費でも仕事の技術を学ぶ研修に参加すべきだ（西川2009） 関連学会に所属している（南・武田2004） 講演会や研修等にはできるだけ参加している（南・武田2004） 関連学会への所属（武田・南2002） 専門職団体の研修発表の機会を活用（武田・南2002） 専門職団体に知識技術向上の機会を求める（武田・南2002）
スーパービジョン等	スーパービジョン・コンサルテーション機会を持つ（一瀬2013） 様々なスーパービジョンの機会を活用している（南・武田2004）
読書	仕事上必要な専門誌や専門書などを定期的に購読している（南・武田2004） 専門職団体の発行雑誌を購読する（武田・南2002）
執筆	実践をもとにして、論文を書くこともある（南・武田2004）
情報へのアクセス	仕事に関連する最新の情報を入手し、更新するよう心がけている（南・武田2004）

この結果、【学会・研修等への参加】がほとんどの論文に共通している学習行動であり、様々な尺度のなかで最も採用されている指標・尺度の要素であると捉えることができる。次に、他者を活用した学習行動である【スーパービジョン等】、ソーシャルワーカーが1人で実施できる【読書】が続き、南・武田（2004）に限られる学習行動として【執筆】、【情報へのアクセス】があった。

本稿は、学習行動の指標化の基礎資料となる具体的な行動のレポーターを増やすために文献研究を行っている。文献研究（第1段階）において抽出された学習行動（表2参照）

は、どれも現任者が実施している学習行動であると推察されるが、さらに行動のレパトリーを増やすために、コンピテンシー（行動特性）に関する研究の蓄積が進んでいる看護分野において同様の文献研究（第2段階）を実施した。

IV. 文献研究（第2段階）の方法と結果

1. 文献抽出と選定について

CiNii(国立情報学研究所 論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/>)を用いて検索式を「(能力 OR 資質 OR 研鑽 OR 専門職 OR 専門性)&(看護 OR 保健師)&(尺度 OR 指標)」とし、939件が該当した(2021年7月15日アクセス)。これらについて、①看護師・保健師を対象とし(学生含む)、②実践能力などを測定するもの、を基準として絞り込みをした結果、10件の論文(学会抄録含む)を研究対象とした(表3参照)。

表3 文献研究（第2段階）の対象となる論文

論文名	年	研究の目的	測定する概念
丸山育子・松成裕子(2020)「看護系大学卒業の看護師の看護実践能力を測定する「看護実践能力自己評価尺度(CNCSS)」の妥当性の検討」『福島県立医科大学看護学部紀要』(22), 13-24.	2020	看護系大学卒業の看護師の看護実践能力を測定する「看護実践能力自己評価尺度(CNCSS)」の妥当性の検討。	看護実践能力
石川智恵(2020)「中堅助産師としての自信の尺度開発と信頼性・妥当性の検討」『日本助産学会誌』34(2), 143-156.	2020	中堅助産師としての自信尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討する。	自信
能見清子・吉本照子・杉田由加里(2018)「病棟看護管理者による中堅看護師の自己教育を促す目標設定に関する支援行動指標の作成と内容妥当性の検証」『千葉看護学会誌』24(1), 43-52.	2018	中堅看護師の自己教育を促す目標設定における病棟看護管理者の支援行動指標を作成し内容妥当性を検証する。	支援行動
渡部瑞穂・荒木田美香子(2018)「行政中堅保健師実践能力尺度の開発:~中小規模市町村における検討~」『日本公衆衛生看護学会誌』7(2), 60-71.	2018	中堅保健師の実践能力向上を目指して中堅保健師実践能力尺度を開発し、中小規模市町村でその信頼性と妥当性を検証することを目的とする。	実践能力
大村光代・山下香枝子(2016)「特別養護老人ホームでの看取りの看護実践能力尺度の開発-信頼性および妥当性の検証-」『日本看護研究学会雑誌』39(1), 1-7.	2016	特養での看取りの看護実践能力尺度の信頼性および妥当性を統計的に検証し、実用性を検討する。	看取りの看護実践能力

大村光代・山下香枝子・西川浩昭(2015)「特別養護老人ホームにおける看取りの看護実践能力の因子構造と関連要因」『日本看護研究学会雑誌』38(2), 2-12.	2015	特養での看取りの看護実践能力の因子構造を明らかにし、その構成概念妥当性と関連要因を統計学的に検証する。	看取りの看護実践能力
林暁子・林智子・井村香積(2014)「看護実践能力における新人看護師のセルフマネジメント力尺度の開発」『日本看護研究学会雑誌』37(3), 202.	2014	看護実践能力における新人看護師のセルフマネジメント力尺度を開発し、妥当性と信頼性を検討する。(※学会抄録)	セルフマネジメント力
菊池昭江(2013)「専門看護師(CNS)における職務上の自律性測定尺度の開発」『国際医療福祉大学学会誌』18(2), 22-35.	2013	専門看護師(CNS)における自律性測定尺度を作成し、その構造的特徴を明らかにする。	自律性
岡本玲子・岩本里織・塩見美抄・他(2010)「保健師の専門性発展力尺度の開発と信頼性・妥当性の検証」『日本公衆衛生雑誌』57(5), 355-365.	2010	保健師の専門性発展力尺度(Professional Development Scale for the Public Health Nurse, 以下 PDS)を開発し、その信頼性と妥当性を検討する。	専門性発展力
石井京子・藤原千恵子・星和美・他(2005)「看護師の職務キャリア尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」『日本看護研究学会雑誌』28(2), 21-30.	2005	看護師を対象とした職務キャリア尺度の作成、および信頼性と妥当性の検討。	職務キャリア

2. 文献研究(第2段階)の結果①

表3の結果を概観すると、ソーシャルワーク分野の論文等(第1段階)では「専門職性」を測定する指標・尺度が中心であったのに対し、看護分野では、「看護実践能力」を測定する指標・尺度が多く、実践能力の一部として自己研鑽のための学習行動が位置づけられていることが分かる。その他、「自信」「支援行動」「自律性」「職務キャリア」などの概念の一部に学習行動が位置づけられているものもあった。

3. 文献研究(第2段階)の結果②

次に、研究対象10本で紹介されている指標・尺度項目のうち、看護師・保健師の学習行動に関する内容の項目を抜き出し、同じ意味内容ごとにカテゴリー化し整理した(表4参照)。

表4 尺度項目のカテゴリー化

概念	カテゴリー名	学習行動にかかわる尺度項目
学習管理	自分の能力のアセスメント	「現実の自分の力を理解する力」(林暁子・林智子・井村2014) 「自分を理解する力」(林暁子・林智子・井村2014) 私は毎年、向上が必要な自分の専門能力を明確にする(岡本・岩本・塩見・他2010)
	学習計画を立てる	私は、看護師としての今後の目標を明確にし、それに向かって自己研鑽している(丸山・松成2020) 助産師として「こうありたい」という目標を持ち、それを実現するために取り組む(石川2020) どのような学習習慣にしたいのか尋ね、必要であれば学習計画を共に考える(能見・吉本・杉田2018) 私は毎年、自分の専門能力を開発するための行動計画を書く(岡本・岩本・塩見・他2010)
学習機会・ 資源の活用	情報へのアクセス	私は、看護職能団体(看護協会等)や学会等から発信される情報に目を通している(丸山・松成2020) 最新情報を得るための手段を知っている(渡部・荒木田2018)
	他者を活用した解決	私は、わからないことがあったら、文献で調べたり、先輩看護師、医師に質問し解決している(丸山・松成2020) 私は根拠や方法が不明瞭なときに教育研究者や先輩に協力を求める(岡本・岩本・塩見・他2010) 私は他者の批判にも発展的な答えを出す(岡本・岩本・塩見・他2010) 職場の保健師同士の交流を積極的に持つ(渡部・荒木田2018) 私は同僚と互いの気づきや意見を共有する(岡本・岩本・塩見・他2010) 仕事に関係する人脈が豊富である(石井・藤原・星・他2005)
	学会・研修等への参加	私は、専門職として能力を維持、向上させるために研修会・学会に参加している(丸山・松成2020) 計画的に院内外の教育プログラムや研修に参加し、継続的に自己研鑽する(石川2020) 興味があることを聞きながら、研修情報は、時期、場所、学べる内容について、具体的に示しながら情報提供し、研修参加を勧める(能見・吉本・杉田2018) 自組織や外部研修など、様々な継続教育プログラムについて情報を提供し、本人の経験や関心に沿うように活用を勧める(能見・吉本・杉田2018) 自己の課題の解決のために適切な研修を選択し参加する(渡部・荒木田2018) 同僚や先輩に自己研鑽の場を紹介するなど、共に学ぶ姿勢を持っている(渡部・荒木田2018) 私は毎年、専門的活動に必要な新しい知識・技術を得る機会と場を持つ(岡本・岩本・塩見・他2010) 国内研修の参加経験がある(石井・藤原・星・他2005)
	研究と学会発表 (実践報告含む)	外部の学会発表など組織としての支援体制の情報を提供する(能見・吉本・杉田2018) 専門分野の研究に主体的に取り組むことができる(菊池2013) 学術集会において研究成果を発表することができる(菊池2013) 看護職員と共同研究を行い、スタッフの参加を促すことができる(菊池2013) 自ら得た研究成果を職場で活用することができる(菊池2013) 施設外の研究発表会の企画・運営に参画することができる(菊池2013) 看護職員の学術集会発表のための研究を支援することができる(看護学会、各専門分野の開催する学会など) (菊池2013) 看護研究や学会発表の経験が豊富である(石井・藤原・星・他2005) 研究の発表能力が優れている(石井・藤原・星・他2005) 自己の専門分野が明確である(石井・藤原・星・他2005) 研究の指導が出来る(石井・藤原・星・他2005)
	新たな役割の獲得	リーダー研修(論理的思考の訓練、資料作成、プレゼンの機会がある)の参加を勧める(能見・吉本・杉田2018) リーダー役割を任せ、人の意見をまとめたり、考えたり、企画や計画書、レポートを書いたりする機会を作る(能見・吉本・杉田2018) 委員会や新人教育の役割を担い病棟の仕組みを提案してもらう(能見・吉本・杉田2018)
	ロールモデルに学ぶ	私は専門職として尊敬する人の活動の仕方・姿勢を見習う(岡本・岩本・塩見・他2010)
	経験学習	実践の振り返り (省察)
記録に残す		印象に残ったケアや看護体験などについて、ナラティブやケースレポートとして書いてもらう(能見・吉本・杉田2018)

その結果、「自分の能力のアセスメント」、「学習計画を立てる」、「情報へのアクセス」、「他者を活用した解決」、「学会・研修等への参加」、「研究と学会発表（実践報告含む）」、「新たな役割の獲得」、「ロールモデルに学ぶ」、「実践の振り返り（省察）」、「記録に残す」、の

テゴリーに整理され、さらにカテゴリーを【学習管理】、【学習機会・資源の活用】、【経験学習】の3つの概念にまとめた。ソーシャルワークの文献に比べて学習行動のレパトリーが多岐にわたっており、特に、「自分の能力のアセスメント」と「学習計画を立てる」ことは学習管理として、己の学習をマネジメントする能力として必要となるものであり、また、「他者を活用した解決」はスーパービジョンといった方法をとらなくても、日々の業務における確認や相談といった行為も学習のための行動であると捉えることができる。

V. 考察

1. 文献研究によって抽出された学習行動のカテゴリーと概念について

本稿では、精神保健福祉士の学習行動の指標化の基礎資料となる具体的な行動を明らかにするために、ソーシャルワーク分野（第1段階）、看護分野（第2段階）の指標・尺度をレビューし、学習行動を抽出した。第1段階のレビューで整理したカテゴリーと第2段階のレビューで整理したカテゴリーを統合すると下記のようなになった（表5参照）。

なお、統合において、尺度項目の内容を踏まえて、第1段階の「スーパービジョン等」は「他者を活用した解決」へ、「執筆」は「研究と学会発表（実践報告を含む）」へ統合した。

表5 学習行動のカテゴリーと概念

概念	カテゴリー名
学習管理	自分の能力のアセスメント
	学習計画を立てる
学習機会・資源の活用	情報へのアクセス
	他者を活用した解決
	学会・研修等への参加
	研究と学会発表 (実践報告含む)
	読書
	新たな役割の獲得
	ロールモデルに学ぶ
経験学習	実践の振り返り (省察)
	記録に残す

看護分野にまで広げてレビューを行ったことで、学習行動のレパトリーが増え、その結果、【学習管理】、【学習機会・資源の活用】、【経験学習】の3つの概念にまとめられた。各概念について考察を進めていく。

【学習管理】と【学習機会・資源の活用】の概念は、学習行動の前提としてまずは「自分の能力のアセスメント」を行い、不足している知識や技術を把握したうえで、それを満たすために「学習計画を立てる」という行動が必要であり、そして「情報へのアクセス」や「学会・研修等への参加」、「研究と学会発表（実践報告含む）」などの学習の機会や資源を活用していくことを示している。こうした学習行動のプロセスを Knowles (1975) は Self-directed learning（自己決定型学習）と呼び、「他人からの助けの有無に関わらず、自分の学習ニーズの把握、ゴールの設定、学習のために必要な人的・物的リソースの把握、適切な学習方法の実施、学習アウトカムの評価を行うことで個人が学習のイニシアチブを取るプロセス」と定義している。第2段階のレビューを通じて抽出された【学習管理】と【学習機会・資源の活用】に含まれるカテゴリーはまさに、自己決定型学習のプロセスと共通するものであり、精神保健福祉士の現任者に求められる学習行動を示していると言える。

次に【経験学習】について考察する。この概念は「実践の振り返り（省察）」、「記録に残す」というカテゴリーから構成されており、印象に残った支援についてレポートを書いたり、体験や支援の適切さについて振り返り、評価する行動を示している。このような自分の経験を振り返り学ぶ行為は、歴史的に経験学習の分野において理論が発展してきた。Dewey は、経験を「個人と個人を取り巻く環境との相互作用」（相互作用の原理）と定義し、「反省的思考」によって経験を振り返り、それが次の経験の基礎となるとしている（Dewey=2004：63 - 66；中原 2012：88 - 89）。また、「省察（reflection）」を繰り返し行いつつ専門的力を高めていく専門家像「省察的实践家」を提唱したのは Schön (1983) であり、Kolb は具体的経験→内省的観察→抽象的概念化→能動的実験という学習サイクルの理論を提唱した。（Kolb 1984：40 - 41；中原 2013）。

このように経験学習の理論については様々な論者により研究が進められてきたが、共通していることは経験を振り返る（省察）行為である。精神保健福祉士の日々の実践は、まさに経験の連続であり、学習の源泉が常に現場にあると言える。自分の支援を振り返り、そこから実践知を得て、次の支援に活かしていくサイクルを絶え間なく繰り返すことはまさに経験学習であると言える。

2. 第2段階で抽出されたカテゴリーの精神保健福祉士への適用について

本稿では、2段階の文献研究を行っているが、看護分野のレビューで抽出されたカテゴリーの学習行動が、精神保健福祉士の学習行動として適用できるかどうか検討する必要がある。ここでは、【学習管理】と【学習機会・資源の活用】の一部のカテゴリーに絞って考察する。

①【学習管理】「自分の能力のアセスメント」「学習計画を立てる」について

これらのカテゴリーは、第1段階のソーシャルワーク分野のレビューでは抽出に至らなかったが、先述の自己決定型学習（Knowles1975）で言われるように、精神保健福祉士の現任者が自ら自己研鑽を進めていくためには必要な学習行動であることは言うまでもない。

公益社団法人日本精神保健福祉士協会は2020年6月に「精神保健福祉士のキャリアラダー」を公表し、同年9月に精神保健福祉士の資質向上支援を目的に開発した道具（ツール）「さくらセット」を公表している（公益社団法人日本精神保健福祉士2020b）。このキャリアラダーでは、精神保健福祉士に求められる力量として6項目を設定し、資質向上の目安として経験年数をもとにステップを5つ設けている。そして、振り返り担当者と一緒にフェイスシートを用いながら目標にするステップと達成課題、達成のための手段等を記入し、定期的に振り返る仕組みとなっている。つまり、自己決定型学習（Knowles1975）のプロセスを具現化するものと言え、看護分野のレビューで抽出された【学習管理】「自分の能力のアセスメント」「学習計画を立てる」については、精神保健福祉士の学習行動として必要性が高いと考える。

②【学習機会・資源の活用】「他者を活用した解決」について

このカテゴリーについては、第1段階のソーシャルワーク分野のレビューでは「スーパービジョン等」というカテゴリーに整理されており、第2段階の看護分野のレビューにおいて整理された「他者を活用した解決」というカテゴリーに統合している。

看護分野においては歴史的に、新卒看護師の能力開発のため、先輩看護師が職場内でトレーニングしていく教育手法としてのプリセプター制度が確立している（小宮山・水澤・岡村2016）。そのため、看護業務を通して先輩看護師に質問したり、助言を求めることが一般的になっている職種と言える。このことは、精神保健福祉士にも当てはまることであり、第1段階のレビューでは「スーパービジョン等」というカテゴリーに整理されたが、スーパービジョンやコンサルテーションという形をとらなくても、適宜同僚や先輩に確認や相談しながらソーシャルワーク業務を行っていると思定されることから、精神保健福祉士も行っている学習行動と判断した。

③【学習機会・資源の活用】「研究と学会発表（実践報告含む）」について

このカテゴリーは、第1段階で整理した「執筆」を第2段階の「研究と学会発表（実践報告を含む）」へ統合したものであるが、研究や学会発表等の学習行動については、看護分野において数多く抽出された。坂下・北島・西平・他（2013）による調査によれば、全国の中・大規模の病院のうち、無作為抽出した3000病院に質問紙調査（回収率37.7%）を実施したところ、中・大規模の病院では高い頻度で（88.4%）看護研究が実施されていることが明らかとなっている。つまり、看護分野においては、教育の一環として看護研究が組織

的に行われている実態があると言える。これに対して、公益社団法人日本精神保健福祉士協会が2017年に協会構成員11,254人に対して実施した「精神保健福祉士の業務実態等に関する調査」（回収率36.8%）によれば、1日に実施した業務ごとの実施割合において「調査・研究」は3.2%という結果になっている。先述の坂下らの調査とは調査対象や方法が異なるため単純に比較することはできないが、それでもソーシャルワーク分野においては、組織的に研究に取り組む状況ではないと推察される。しかしながら、毎年開催されている日本精神保健福祉士協会の全国大会では数多くの実践報告がなされている実情もある。したがって、研究とまではいなくても実践報告としてまとめるといった学習行動はなされていることから、「研究と学会発表（実践報告含む）」の категорияは精神保健福祉士の学習行動としても適用可能と考えられる。

VI. おわりに

本稿では、精神保健福祉士の学習行動の指標化を図るため、その基礎資料となる具体的な行動を明らかにするために、文献研究の方法を用いて整理を行った。最後に本研究の限界と今後の課題を述べる。

本研究の限界として、検索に用いたデータベースが限定されていたため、検索に挙がらなかった指標・尺度が存在している可能性を否定できないことである。しかしながら、今回の文献研究において抽出した学習行動は、対象とした論文等で意味内容が似通っていることが多かったため、求められる学習行動は抽出できたのではないかと推察する。

次に今後の課題は下記2点が挙げられる。1つ目は、本研究の限界と関連することであるが、既存の指標・尺度の項目をそのまま抽出しているため、精神保健福祉士がとる学習行動の指標作成においては、抽出した尺度項目の内容を精査し、精神保健福祉士の現任者に確認を取りながらワーディングを行う必要があることである。

2つ目は、学習行動に影響を与える要因との関連性の検証である。ソーシャルワークが人と環境の相互作用の視点で現象を捉えることと同様に、精神保健福祉士の学習行動も精神保健福祉士を取り巻く環境の影響を受けていると推察される。従って、職場の教育体制や組織風土などの環境要因との関連性について定量的に検証することも求められる。

【引用文献】

- 大辞林第三版 <https://kotobank.jp/word/%E5%AD%A6%E7%BF%92-11976>, 2020.9.24.
- Dewey, J. (1938) Experience and Education. Kappa Delta Pi Lecture. (=2004, 市村尚久訳『経験と教育』講談社。)
- 林暁子・林智子・井村香積 (2014) 「看護実践能力における新人看護師のセルフマネジメント力尺度の開発」『日本看護研究学会雑誌』37 (3), 202.
- 石井京子・藤原千恵子・星和美・他 (2005) 「看護師の職務キャリア尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」『日本看護研究学会雑誌』28 (2), 21 - 30.

- 石川智恵 (2020) 「中堅助産師としての自信の尺度開発と信頼性・妥当性の検討」『日本助産学会誌』34 (2), 143 - 156.
- 一瀬貴子 (2013) 「高齢者虐待対応専門職としての社会福祉士の『専門職性自己評価』に対するアイディアイメージと実践的意識との比較」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』16 (2), 19 - 28.
- 菊池昭江 (2013) 「専門看護師 (CNS) における職務上の自律性測定尺度の開発」『国際医療福祉大学学会誌』18 (2), 22 - 35.
- Knowles M.S. (1975) :Self-Directed Learning : A Guide for Learners and Teachers, Association Press, New York, NY.
- Kolb, D.A. (1984) Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. FT Press.
- 小宮山陽子・水澤千代子・岡村典子 (2016) 「プリセプター制度の現状と課題」『看護研究交流センター活動報告書』27, 59 - 62.
- 公益社団法人日本精神保健福祉士協会 (2018) 「精神保健福祉士の倫理綱領」 (<http://www.japsw.or.jp/syokai/rinri/japsw.htm>, 2020.10.27)
- 公益社団法人日本精神保健福祉士協会 (2020a) 『厚生労働省 令和元年度障害者総合福祉推進事業 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築及び地域共生社会の実現に向けた精神保健福祉士の資質向上の在り方等に関する調査 報告書』 (<https://www.jamhsw.or.jp/ugoki/hokokusyo/202003jinzaikusei.html>, 2022.10.28)
- 公益社団法人日本精神保健福祉士協会 (2020b) 「キャリアラダーとワークシート (さくらセット)」 (<https://www.jamhsw.or.jp/ugoki/kensyu/sakura-set.html>, 2022.10.27).
- 公益社団法人日本精神保健福祉士協会 (2020c) 『精神保健福祉士の業務実態等に関する調査報告書』 (<https://www.jamhsw.or.jp/kaiin/hokokusyo/2019-gyomu.html>, 2022.10.28)
- 厚生労働省 (2019) 「精神保健福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」 (<https://www.mhlw.go.jp/content/12205000/000524181.pdf>, 2020.10.27).
- 厚生労働省 (2020) 「精神保健福祉士資格取得後の継続教育や人材育成の在り方について」 (<https://www.mhlw.go.jp/content/12205000/000604850.pdf>, 2020.10.27).
- 丸山育子・松成裕子 (2020) 「看護系大学卒業の看護師の看護実践能力を測定する「看護実践能力自己評価尺度 (CNCSS)」の妥当性の検討」『福島県立医科大学看護学部紀要』(22), 13 - 24.
- 南彩子・武田加代子 (2004) 『ソーシャルワーク専門職性自己評価』相川書房.
- 南彩子・武田加代子 (2005) 「学生のソーシャルワーク専門職性到達度とその関連要因の分析」『天理大学学報』57 (1), 17 - 29.
- 中原淳 (2012) 『経営学習論 - 人材育成を科学する』東京大学出版会.
- 中原淳 (2013) 「経験学習の理論的系譜と研究動向」『日本労働研究雑誌』55 (10), 4 - 14.
- 西川ハンナ (2009) 「ソーシャルワーク専門職の価値志向性測定試案」『共栄学園短期大学研究紀要』(25), 67 - 78.
- 能見清子・吉本照子・杉田由加里 (2018) 「病棟看護管理者による中堅看護師の自己教育を促す目標設定に関する支援行動指標の作成と内容妥当性の検証」『千葉看護学会誌』24 (1), 43 - 52.
- 岡本玲子・岩本里織・塩見美抄・他 (2010) 「保健師の専門性発展力尺度の開発と信頼性・妥当性の検証」『日本公衆衛生雑誌』57 (5), 355 - 365.
- 大村光代・山下香枝子・西川浩昭 (2015) 「特別養護老人ホームにおける看取りの看護実践能力の因子構造と関連要因」『日本看護研究学会雑誌』38 (2), 2 - 12.
- 大村光代・山下香枝子 (2016) 「特別養護老人ホームでの看取りの看護実践能力尺度の開発 - 信頼性および妥当性の検証 - 」『日本看護研究学会雑誌』39 (1), 1 - 7.

- 坂入竜治（2018）「精神保健福祉士の学びを支える諸体制の特徴と関係性に関する一考察 - 生涯に渡る学びの理論構築に向けて - 」『武蔵野大学人間科学研究年報』(8), 43 - 57.
- 坂下玲子・北島洋子・西平倫子・他（2013）「中・大規模病院における看護研究に関する全国調査」『日本看護科学会誌』33 (1), 91-97.
- Schön, Donald A (1983) *The Reflective Practitioner : How professional Think in Action*, Basic Books。
（=2001、佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える』ゆみる出版、
=2007、柳沢昌一・三輪健二監訳『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房。）
- 武田加代子・南彩子（2002）「ソーシャルワークの専門職性評価指標作成の試み」『社会福祉学』42 (2), 32 - 42.
- 渡部瑞穂・荒木田美香子（2018）「行政中堅保健師実践能力尺度の開発：～中小規模市町村における検討～」『日本公衆衛生看護学会誌』7 (2), 60 - 71.
- 山下匡将・伊藤優子・杉山克己・他（2015）「特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性 - ソーシャルワーク専門職性自己評価尺度 (SWPI) を用いた検討 - 」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』51 (4), 201 - 214.